

●高橋悠治 (1938~)

『鳥も使いか』三絃弾き語りを含む合奏 (1993)

荒神琵琶「妙音十二楽」は、琵琶弾き語りの合間に、独立した小合奏曲が同時演奏される。この曲の三味線とオーケストラの関係は、そこから思いついた。

三味線弾き語りは、前弾き、前唄、手事、後唄、止め手。

歌詞は、古事記にある木梨の軽太子の天田振、

天(あま)飛ぶ 鳥も使いぞ

鶴(たづ)が音(ね)の 聞こえむ時は 我が名問はさね

妹の衣通王の恋唄、

きみが往(ゆ)き け長くなりぬ

山たづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

ただし、ことばは途中からはじまり、はじめにもどり、途中で終わる。

オーケストラは「笹葉」「あられ」「蛎貝」「島」「鏡」「幡」「弓」「鳥」「遠音」の九曲。指揮者が題名を告げてはじまり、楽器は、一定の手または替え手により、他の楽器の音に応じて自律的演奏をして、指揮者による磬子の一打で止まる。

二三の曲は重なって演奏される。また舞台裏の一对の太鼓は二種の地と入れ手の組であり、二箇所で紹介する。これらも指揮者の拍子木によってはじまり、銅拍子によって終わる。

初演は1993年8月、高田和子の唄と三絃、岩城宏之指揮のオーケストラ・アンサンブル金沢。

[高橋悠治]

2 Fl (Picc) / 2 Ob / 2 Cl / 2 Fg - 2 Hrn / 2 Trp - 三絃弾き語り - 2 Perc (舞台裏下手=2 Tom-Toms 舞台裏上手=2 Tom-Toms) - Strings (8-6-4-4-2) - Conductor (木鉦 / 銅拍子 / 磬子)

初演：1993年8月31日 金沢市観光会館

岩城宏之(指揮)、高田和子(三絃)

オーケストラ・アンサンブル金沢

委嘱：岩城宏之

●山根明季子 (1982~)

『アーケード』オーケストラのための (2020)

アーケードは、ゲームセンター(和製英語)の意味を持ちます。この音楽はパチンコを含むアミューズメント施設における空間の状態をモデルに作った、一つの質感を持続するドローン音楽です。

BGMがひしめき合う暴力的な轟音環境は、確かにそこに在るけれど耳を閉じられがちで、或いは避けられ、音としてよく聞かれないことが多いです。より強くより大きな音で、人々を魅きつけることが求められる個体がそこには集合し凝縮されていて、音を一つ一つ丁寧に聴くことが難しい。どの層の知覚を捨てどの層の知覚を捨てるか。どこどこを組み合わせるか。或いは自発的に何かを聴くか、選択次第で様相が全く異なります。

消費社会の中で効率的な音楽言語として世界中広く大量に普及された平均律と三和音を中心に、楽曲に組み込んでいきました。音と音を、異なる声を聞かず配慮しないことを意識して重ねてみて、その重なり方を感じ、重なっている状態に寄り添ってみる。感覚は人の数だけ異なり、今その時の様々な要因によって移り変わります。この曲は一つの状態の持続から成る管弦楽曲の一つで、いくつもの層が存在する音という存在に分け入って、観察し、深く聴いたり或いはただ通り過ぎたり、今ここにある身体を通した体験として感覚を映し個々の感覚と接することを目指しています。

[山根明季子]

3 Fl / 2 Ob / 3 Cl / Fg (C-Fg) / C-Fg - 3 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Tub - 4 Perc (I=Drum Set / Popgun / Can / Toy Trumpet / Antique Cym II=Octachime / Glock / Tamb / Ratchet / Sandpaper Blocks / Snare Drum III=Washtub / Vib / Anvil / Snare Drum IV=Drum Set / Windchime / Bell Tree / Tri) - Hrp - Pf - Cel - Electronics - Strings (14-12-10-8-6)

●山本和智 (1975~)

『ヴァーチャリティの平原』第2部 iii) 浮かびの二重螺旋木柱列

2人のマリンビスト、ガムランアンサンブルとオーケストラのための (2018~19)

私の内なるプレイグラウンドである『ヴァーチャリティの平原』の第2部、3楽章にあたるこの作品は全楽章の中でも一際、特異な編成となった。その理由は大きく三つ。①この作品が再演はもとより初演されることなど前提とせず書かれたこと。②西洋音楽が制度化を推し進め、機能性或いは音域の拡充をそれら楽器群に求めていく中であつてもなお、マリimbaを含むいくつかの打楽器には微かに「民族楽器」の香りがすることから、その二面性を「オーケストラとマリimba」、「ガムランアンサンブルとマリimba」によって描いてみたかったということ。③私の敬愛する二人のマリンビスト、西岡まり子、篠田浩美両氏のために作品を書き残したかったということ。

実はこの楽章に限らず『ヴァーチャリティの平原』はこれまでお世話になった演奏家達への謝辞としても書かれている。早い話が「終活」のようなものだ。

さて、ガムランアンサンブルをこうした形で扱う時、最も懸念されるべきは音律の関係性についてかと思われる。だが、同一の楽器ですら異なる極めて個性的な音律の集合体であるこのアンサンブルに調律を強いることはいささか無意味である。ここで私が理想とするのは、さながら水と油が分離した状態にあり、その油膜に反射する光が虹色に揺曳する、そのような状態である。主要動機は“Another Roaming Liquid”中盤のソロ・ヴァイオリンの音型を加工して用いた。

最後にこの奇異なタイトルについて少し述べると、運搬の際などに解体されたマリimbaの鍵盤(それはしばしば巻かれるのだが)が螺旋状の木柱列に見えたということと、そのマリimbaが今回二台あるというだけの話である。ただ果たして浮かばせる必要があったかは正直、分からない。我ながら妙なタイトルを付けたとも思う。

西岡まり子、篠田浩美両氏、優れたガムランアンサンブルであるランバンサリのメンバーに心からの感謝を込めて。

[山本和智]

3 Fl (Picc / Bs-Fl) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg / 4 Sax (S / A / T / Br) - 4 Hrn - 2 Perc (I=Crotales / Tri / Tubular Bells / Cast / 2 Harmonic Pipes / Chajchas / Splash Cym / Temble Blocks / Shaker / Whip / Floor Tom II=Bar Chime / Tam-Tam / 3 Mokushos / Crotales / Cast / Ratchet / Timp / Claves / Guiro / Kin) - Gamelan Ensemble (8 Players=Saron Barung / Saron Demung / Gender / Gender / Bonang Panerus / Bonang Barung / Kenong / Kempul & Gong) - 2 Solo Mar - 2 Perc (Right Side=Tuned Cowbells / Slit Drum / Xyl / Bell Tree / Splash Cym / Caxixi / Chromatic Gongs / Waterphone Left Side=Chromatic Gongs / Slit Drum / Xyl / Tri / 3 Temple Blocks / Tuned Cowbells / Bar Chime / Bamboo Chimes / Suspended Cym) - Strings (Right Side=6-6-4-4-3 Left Side=6-6-4-4-3)

●高橋悠治 (1938~)

『オルフィカ』オーケストラのための (1969)

すべてが過ぎ去り、すべてが帰ってくる 存在の車輪は永遠にまわる
(ニーチェ)

タイトルは古代のオルフェウス教から。伝説の詩人・音楽家オルフェウスは何回も死んではよみがえる。

グリッサンド・揺れ・スタカート・トレモロ・レガートの5種類の音の動きのうち3種類をさまざまに組み合わせ、音の高さ・長さ・強さはコンピュータで確率によって決める。

打楽器を含まない80人のオーケストラは、ちがう楽器の組み合わせによる8つのグループに分かれ、ちがう音色が近く、似た音色が遠くに散っている、広い空間とゆったりした時間を感じられるかもしれない。

われわれは覆われた洞窟に入った(エンパドクレス:詩「浄化」392行)

[高橋悠治]

Fl / 2 Picc / 3 Ob / 2 Cl / CB-Cl / Fg / 2 C-Fg - 4 Hrn / 4 Trp / 3 Trb / Bs-Trb / Tub - Strings (30-12-10-8)

初演: 1969年5月28日 東京文化会館 大ホール
小澤征爾(指揮)、日本フィルハーモニー交響楽団
委嘱: 日本フィルハーモニー交響楽団 / 献呈: 小澤征爾